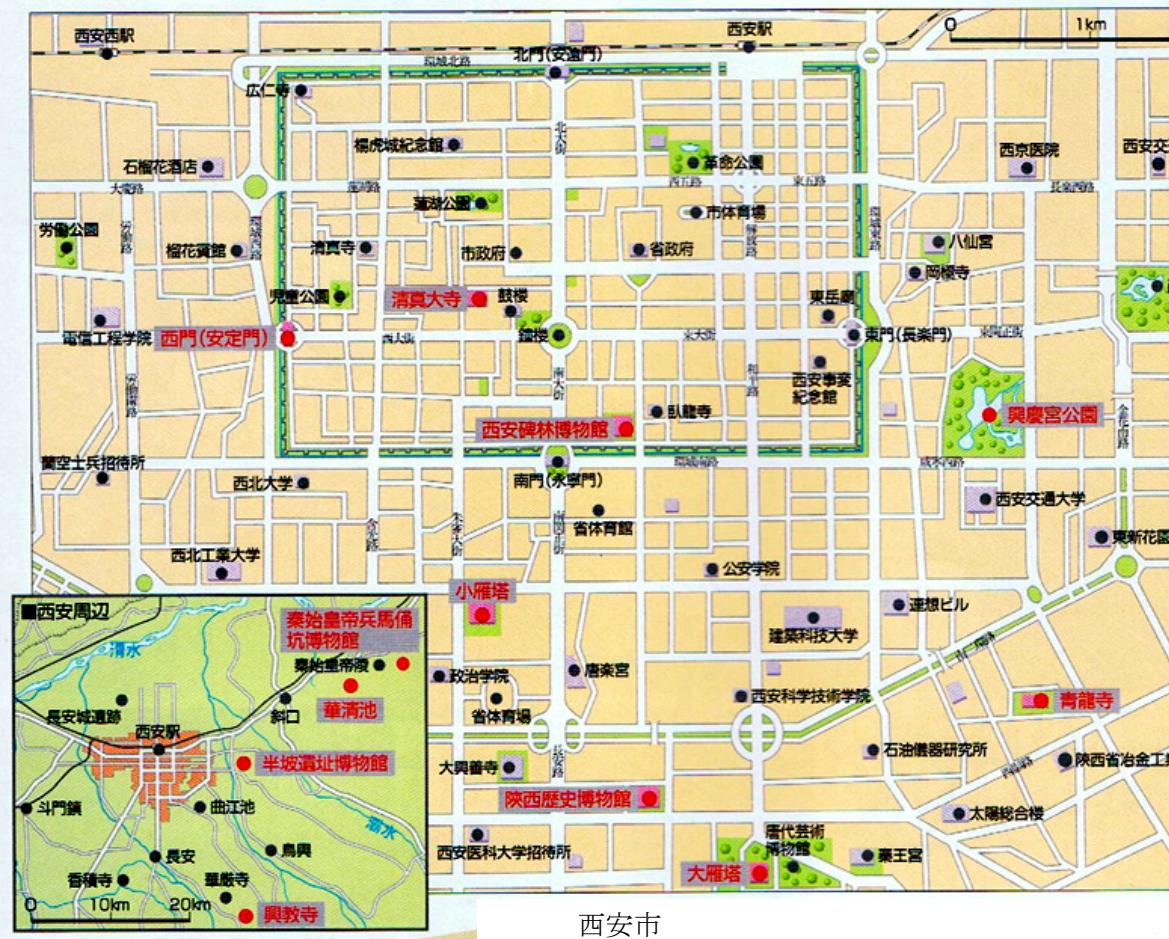
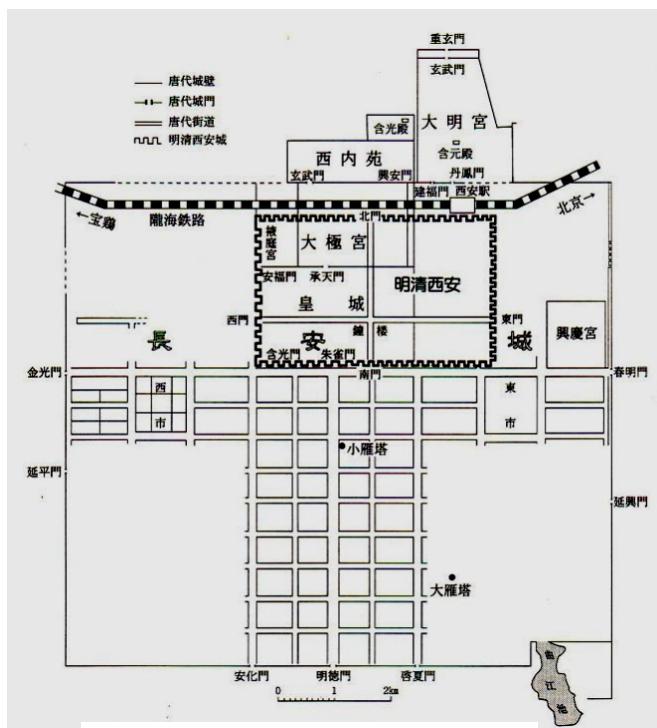


西安・龍門研修ガイド (2012年10月26日～30日)

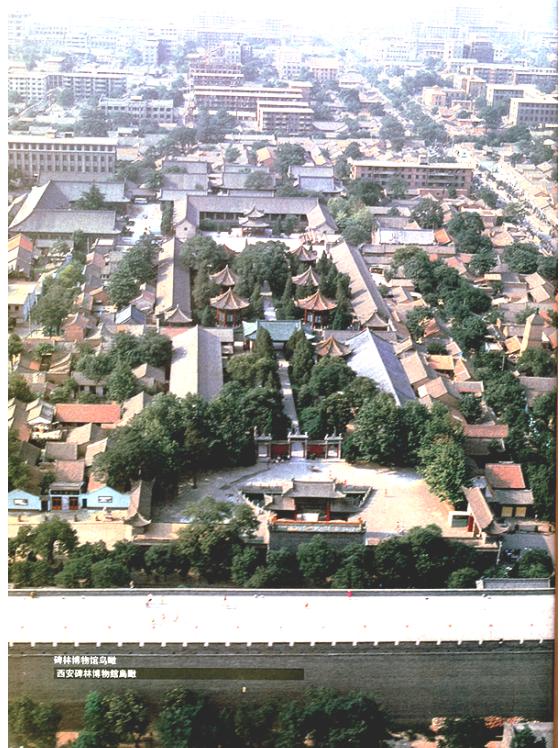
1000余年にわたり、西周・秦・前漢・前趙・前秦・後秦・西魏・北周・隋・唐の10の王朝が都を置いた都市である。古称は長安。
隋代は大興、宋代は京兆、元代は奉元などとも称された。明代から西安と称されている。



西安市



現代の西安と唐代の長安の比較



西安碑林博物館 外観

西安碑林博物館（元は陝西省博物館）

古い情報なので変わっているかもしれない。

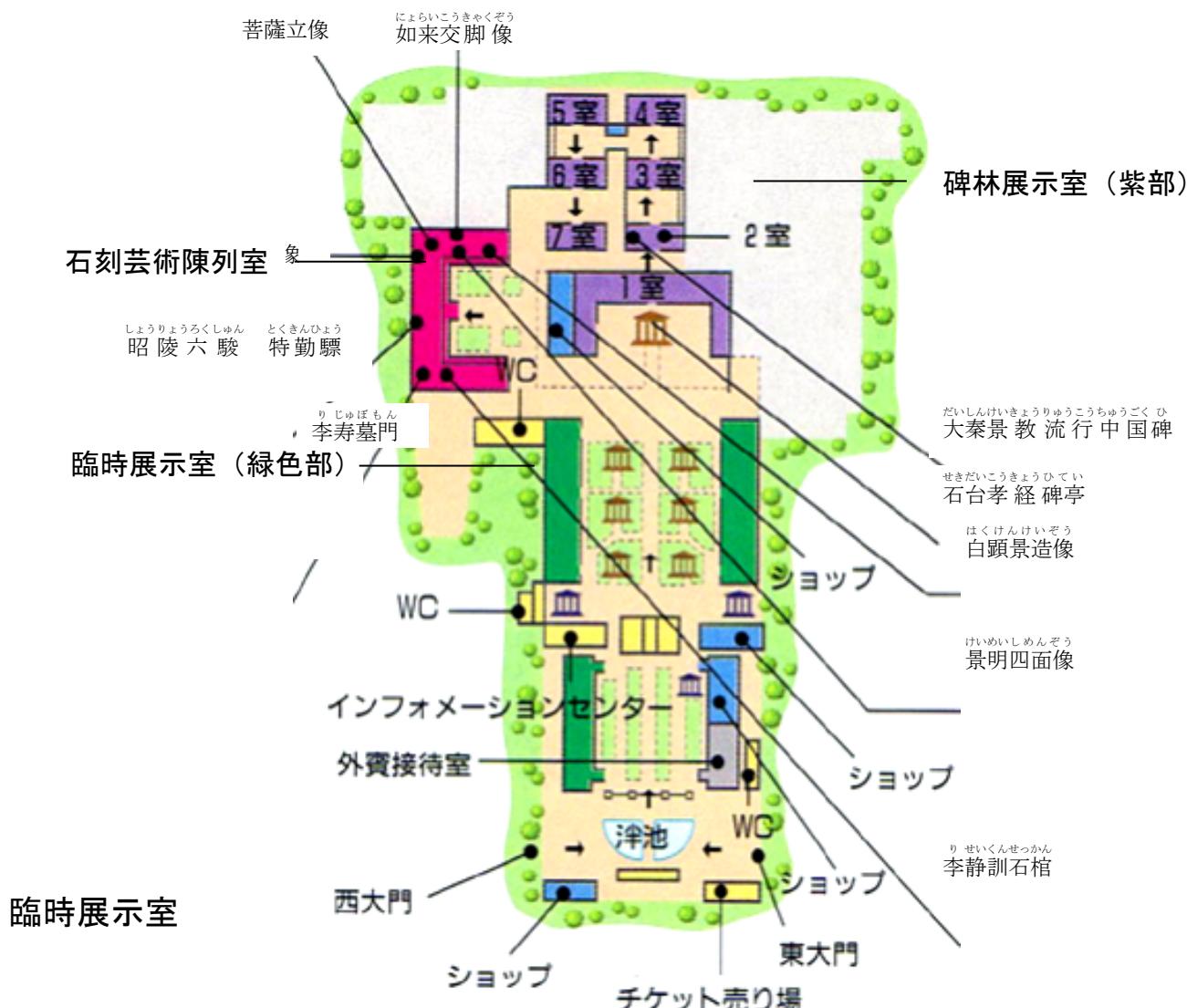
「臨時展示室」「石刻藝術陳列室」「碑林展示室」に分かれ、11000点以上の碑石や彫刻、石仏などが収蔵され、漢代から近代までの碑石を中心に、2500点余が展示されている。「中国最大の石造の書庫」とも称される。“碑が林のように立つ”ということから、この名がついたという。

1087年（北宋時代）唐代の「開成石經」と「石台孝經」を保存するために、孔子廟跡に設立された。1944年、陝西省歴史博物館と名付けられた。1973年、周恩来の指示により、もう一つ博物館を建造し、碑石や石彫以外の文物は他所へ移され、1991年そこが、陝西歴史博物館として誕生し、旧館は1993年、西安碑林博物館として再発足することになった。

「臨時展示室」には、周秦漢隋唐代の陝西地方の青銅器やその他、陶磁器・唐三彩・彫刻・絵画などが展示されている。

「石刻藝術陳列室」には、漢代と唐代の石刻が70余点収集展示されている。（「唐昭陵六駿」や双獣石刻や画像石など）

「碑林展示室」には、漢代から清代までの石碑が展示されている。ここが一般に「西安碑林」と呼ばれている。展示室7と回廊6と碑閣8と碑亭1つがあり1000基ほどの石碑と墓誌300余点が展示されている。



陝西省博物館の入口の大門（東に面している）を入り、池の前を右に折れて第二門を入ると、陳列室が左右に二棟ある。右側は中国古代史博物館、左側はイベントホールらしい。右側の博物館の奥半分は旅游商店になっている。そこを出たら第三門がある。第三門の右側につづく棟は複製品の売店、その右斜め前に景龍觀鐘がある。

第三門の左側につづく棟は休息所、その左斜め前に大夏石馬がある。景龍觀鐘と大夏石馬の並びに、長い陳列棟がある。それが臨時展示室である。この左右の陳列室の間に八角の碑亭が6個あり、今は土産物屋になっている。

左側の陳列室は、周・秦・漢の歴史陳列室で、張騫・班超の出使西域路線図、敦煌壁画・木簡・陶彩馬・唐代の墓石拓本（胡旋舞）、壁画拓本・仏画などが陳列されている。

右側の陳列室は、隋・唐の歴史陳列室で、仏教芸術、ペルシャの金銀の壺・「漢委奴国王印」・玄奘法師像の拓本などが陳列されている。

石刻藝術陳列室（西安碑林の西側、正面碑亭の左方にある）

「昭陵六駿」など国宝級の唐代の彫刻群を中心に展示されている。収蔵品のほとんどが1990年以降、陝西歴史博物館へ移された。

「昭陵六駿 特勤驃」（唐636年）高さ171cm 浮き彫り

太宗李世民は、戦いで自らが騎乗した愛馬6頭をモチーフとした石彫を、自分と皇后の墓である「昭陵」を飾るために造らせた。下絵は閣立本。「特勤驃」は、栗毛に白い斑点のある馬のこと。

馬は軍事力と地位の象徴であり、皇帝や貴族にとって特別な存在であった。

「菩薩立像」（唐8世紀）高さ110cm 白大理石像

“東方のヴィーナス”とも呼ばれる。出土時から、頭部・両腕・両膝下がない。盛唐期の高度な技術を示す。

「菩薩坐像」（唐8世紀）白大理石像 玄宗皇帝の離宮の興慶宮跡から出土した。

「景明四面像」北魏501年（景明2）高さ58cm×幅58cm

石塊の四面に龕を造り、それぞれに、如来坐像をはさんで、二菩薩立像が配されている。

「如来交脚像」北魏471年（皇興5）高さ86cm幅55cm

弥勒仏である。背面には弥勒下生説話図が表されている。

「李靜訓石棺」（隋608年）高さ122cm、幅89cm、長さ192cm

李靜訓は隋の皇帝の親戚で、9歳で亡くなった。

中央正面に「開者即死」と刻字がある。盗掘防止のためらしい。

西安碑林（碑林展示室）

ひてい 入口（碑亭）

「石台孝経」(唐・745年 玄宗書) 高さ5m、幅3m×4枚の黒大理石に刻されている。

内容は玄宗による『孝経』の解説である。本文は隸書体。唐隸の典型。

四面碑(375×124cm)、西安碑林で最大の碑。もとは、大学に建てられた。

篆書4行各行4字の題額は皇太子李亨(後の肅宗)の筆で「大唐開元天宝聖文神武皇帝注孝経台」と刻されている。

四面環刻、第1面から第3面まで1行55字の18行、注が小字で、1字分に4字の割合で刻されている。第4面は7行目までが本文のつづきで、その左側は上下2段に分け、上段には上表と批答、下段には、碑の建立の関係者45人の名が4段に刻されている。上表は李齊古の行書小字(9行300字)批答は玄宗の草書大字が3行に刻されている。第4面の45人の氏名のあとに、明清代に刻された9行の落書がある。「石台」とは、高さ20cm余の碑座の上に建てられたことからつけられた。「上表」とは君主への意見書。「批答」とは上表への回答のこと。



「石台孝経」部分

せいあん ひりん 西安碑林 第1室

「開成石経」 唐の太和4年(830)～開成2年(837)

「石経」とは、儒教の經典十三経が刻まれたものである。

この“石の教科書”を保存するために西安碑林は始まった。

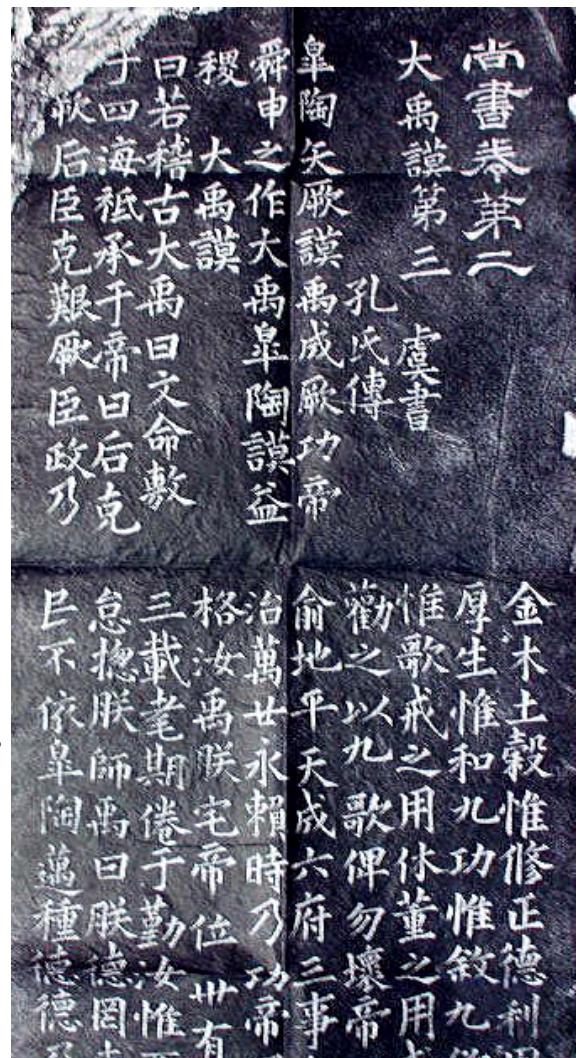
縦約217×横97cm、厚さ28cmの石114枚の裏表に、
字大約2.3×2.0cmで合計65万字余が刻されている。經典名は
隸書体で書かれている。この碑は科挙受験者のために公示された。

文宗李昂が、国子祭酒(国立大学総長)の鄭覃の建議により、
約七年かけて、艾居梅と陳王界らに楷書で刻させたもので、開成年代
に完成したのでこの名がある。

皇帝は、この石経を長安城務本坊の中にある国子監(国立大学)
の敷地に「石台孝経」とともに立て、大学生と文士たちに勉強させた。

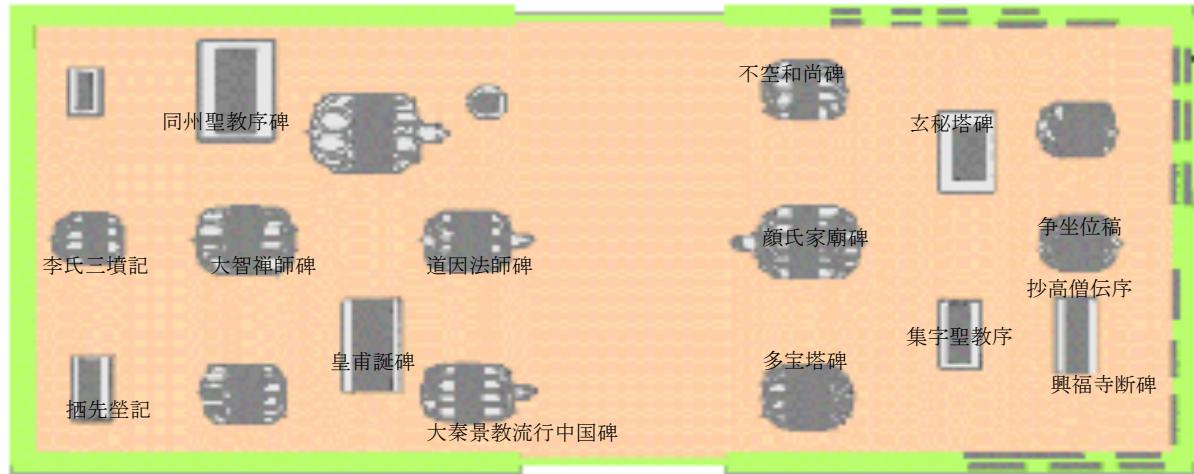
文の内容は封建道徳で、これにより、支配者に都合のいい官僚を
養成することを目的としたものである。

尚書卷第2に「平成」のもとになった字句がある。(11石～19石)
唐代の正字体である、五經文字(776年)は105石～113石に、
九經字様(833年)は113石～114石にある。



「開成石経」(尚書卷第二 部分)

西安碑林 第2室 (唐代を中心とした石碑と墓誌)



「大秦景教流行中國碑」(唐・781年) 呂秀巖書

279×99 cm 満行 62字×32行 黒石灰石。

碑側と碑下にシリア文字(約70人の僧侶の名が刻されている)

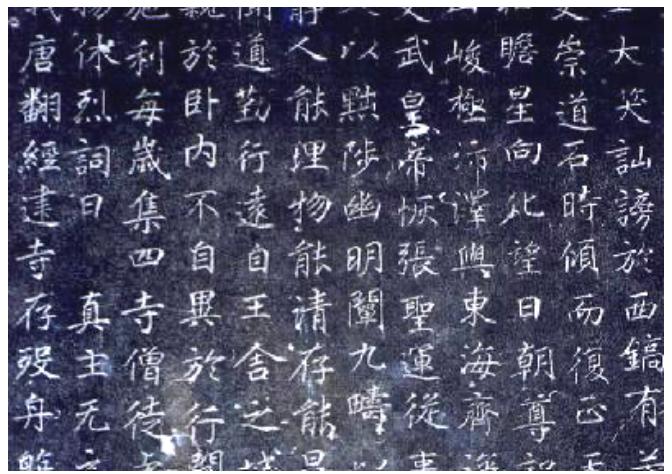
大秦とはローマ帝国の東方領のこと。

景教とはネストリウス派キリスト教のこと。

景教の唐への伝来を記念した石碑である。

景教の教義や布教活動の状況などが刻されている。

高野山奥之院と京大にレプリカがある。



部分拓本

「多宝塔碑」(唐・752年) 顔真卿44歳の楷書 239.37×127.26 cm

満行 66字 34行 題額は徐浩の隸書 撰文は岑勛。

長安の千福寺に僧・楚金が多宝塔を建立した由来が記されている。

「郭氏家廟碑」(唐・764年) 顔真卿56歳の撰文と楷書。

371×126 cm 題額は代宗皇帝。満行 58字 30行。

すでに「顔体」が完成している。

安史の乱平定の勲功第一にかぞえられる、

汾陽王郭子儀が父親の郭敬之の家廟を建てたときに建てられた碑。

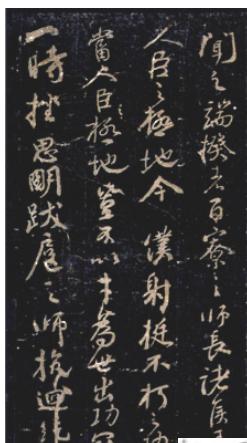
「争坐位稿」(唐・764年) 顔真卿56歳の行書

真蹟は伝わっていない。これは宋代の刻石(関中本)書簡の草稿である。「争坐位帖」ともいう。

「抄高僧伝序」北宋 夢英書 行書 撰文陶谷



多宝塔碑 拓本部分



争坐位文稿 拓



「争坐位稿」の碑陰に刻されている。

152×81 cm 満行 24 字、17 行 篆書の題字がある。

夢英の生没はよく分からぬ。特に篆書に巧であった。

「十八体書」が有名、第三室にある。

抄高僧伝 拓本部分

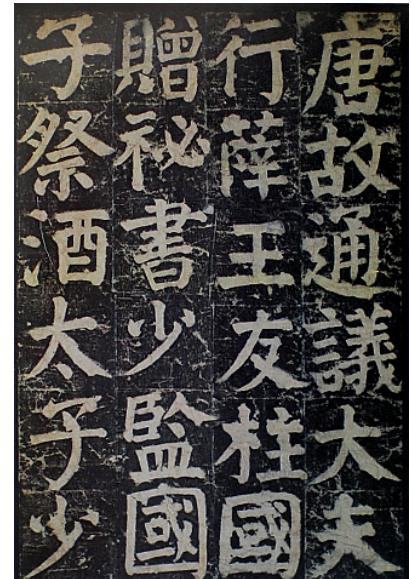
がんしのかびょうひ
「顏氏家廟碑」(唐・780年) 顔真卿72歳の撰文と書 碑高 345×160 cm

四面碑。両面 満行 47 字、各 24 行。両側 満行 52 字、各 6 行。

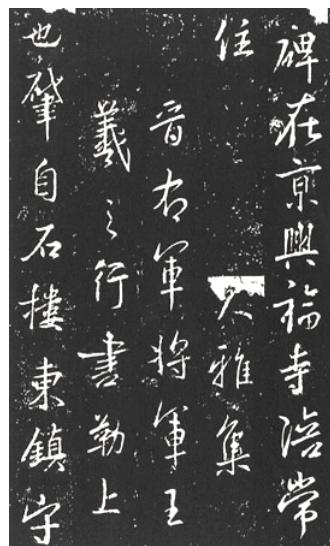
篆額は李陽冰の篆書(「顏氏家廟之碑」)。顔真卿の代表作。「顔法」の典型。
吏部尚書のとき長安で書かれた。

父の顔惟貞の廟を建てたとき、この碑を建てて、顔氏一族の履歴を記した。

「顔惟貞廟碑」ともいう。



顔氏家廟碑 拓本部分



興福寺断碑 拓本部分

こうふくじだんび
「興福寺断碑」唐・開元9年(721)僧大雅、

集王羲之書、行書 103×81 cm 満行 25 字、35 行。

興福寺の僧大雅が王羲之の行書を集字したもの。

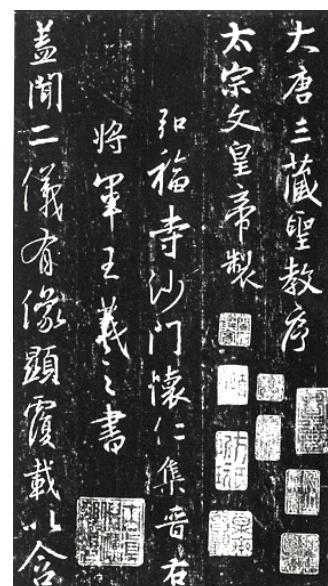
上半分が失われている。「集字聖教序」より約 50 年後に建てられたようである。

しゅうじじょうぎょうじょ
「集字聖教序」(唐・672年)僧懷仁集字

315.3×141.3 cm 集王羲之書、行書 「集王聖教序」ともいう。

弘福寺の僧懷仁が高宗に命じられ、25 年かけて王羲之の文字を集めて碑に刻したもの。字数約 1800 字。

内容は、唐の太宗が玄奘三藏の業績を称えた文章と高宗の序記、玄奘訳の般若心経が記されている。



集字聖教序 拓本部分



玄秘塔碑 拓本部分

がんびとうひ
「玄秘塔碑」(唐・841年)柳公權63歳の楷書。

柳公權書の篆額 12 字 「唐故左街僧錄大達法師碑銘」

碑文は満行 54 字、28 行。撰文は裴休。386×120 cm
大達法師端甫の業績と端甫の埋骨塔である玄秘塔の由来を記したものである。※左街僧錄は寺院の総取締。

「用筆は心にあり、心正しければ則ち筆正し」(柳公權)

ふくうおしょうひ
「不空和尚碑」(唐・781年)徐浩79歳の楷書



305×99 cm 満行 48 字、23 行。

不空和尚はインドから帰化した密教の高僧で、大興善寺で密教を教えた。

その門弟惠果が青龍寺で空海に密教を伝えた。

この碑は、和尚没後に、大興善寺に建てられたものである。



皇甫誕碑 拓本部分

不空和尚碑 拓本部分

「皇甫誕碑」唐・貞觀年間 (604-643) 欧陽詢書

撰文于志寧 篆額 12 字 満行 59 字、全 28 行

260×96 cm 字面 (185×96 cm)

隋に仕えた皇甫誕のことが記されている。

子の無逸が父の思い出のために建てたもの。

風化などで文字が欠けつつある。

清初にはあった「無逸」が近拓では消えている。この無逸のある拓本を「無逸本」といいます。

歐陽詢の最後に到達した境地を示す、最晩年の楷書。

「道因法師碑」(唐・663年) 欧陽通30歳頃の楷書 撰文は李儼

312×102 cm 満行 73 字、34 行 道因法師没後に長安の慧日寺の門人らが建てた碑。

道因法師は玄奘三蔵とともに經典の翻訳に従事した高僧である。

この碑は、碑額部分に釈迦牟尼など三尊が彫刻され、

その下に題字が刻されている大変珍しい形式の碑である。

歐陽通は歐陽詢の晩年の子。幼い時に父は世を去り、

父から直接、書を習えなかったが、母が父の書を集めて、

彼に教えたといわれている。

「同州聖教序碑」(唐・663年) 褚遂良書

401×113 cm 満行 58 字、29 行 人物座

同州の大荔城内より、1974 年碑林に移された。

同州は現在の西安の北東にある陝西省の大荔県。

現存する褚遂良の聖教序の碑はこの碑と「雁塔聖教序記

碑」の2碑である。これは「雁塔聖教序記碑」より 10 年

後に建てられた。褚遂良没後 5 年のことである。「雁塔聖教序記碑」のコピーか?



同州聖教序碑 拓本部分



道因法師碑 拓本部分

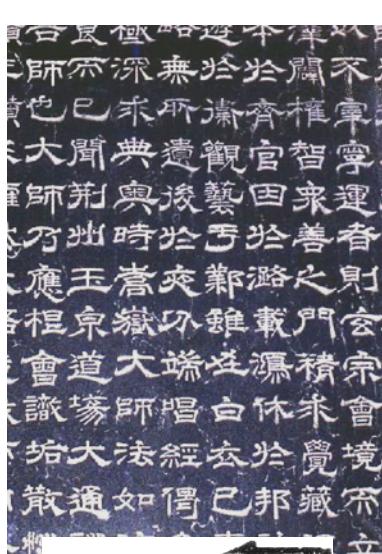
「大智禪師碑」(唐・736年) 史惟則書と篆額

345×114 cm 満行 61 字、32 行 大智禪師の功德碑である。

史惟則は、唐代を代表する、隸書の名家の一人である。彼の書は、

中国の書の主流であった。この碑は、唐碑の傑作と言われ、大変重要なものである。

「李氏三墳記碑」(唐・767年) 李陽冰の篆書



163×80 cm 碑陽（表）は、13行、満行23字

碑陰（裏）は、11行、満行23字。

「三墳記碑」ともいう。

李曜卿達、三兄弟を讃えた墓碑銘。亡くなった三兄弟の末弟の、季卿が撰文。季卿の甥の李陽冰が書いた。

李陽冰は、唐代第一の篆書の名家である。

約1000年前の秦代に李斯が書いた「嶧山碑」などを参考に、

30年間小篆を学び、書法を会得した、と伝えられている。

玉箸篆の典型。

せんせんえいき
「搢先塋記」(唐・767年) 李陽冰書 李季卿撰文 栗光刻

171×79 cm 13行、満行26字。

この碑は、宋代（1010年）に翻刻されたもの。

「塋」は、墓のこと。李曜卿兄弟を改めて葬ったもの

そのほか、下記のものなどがある。

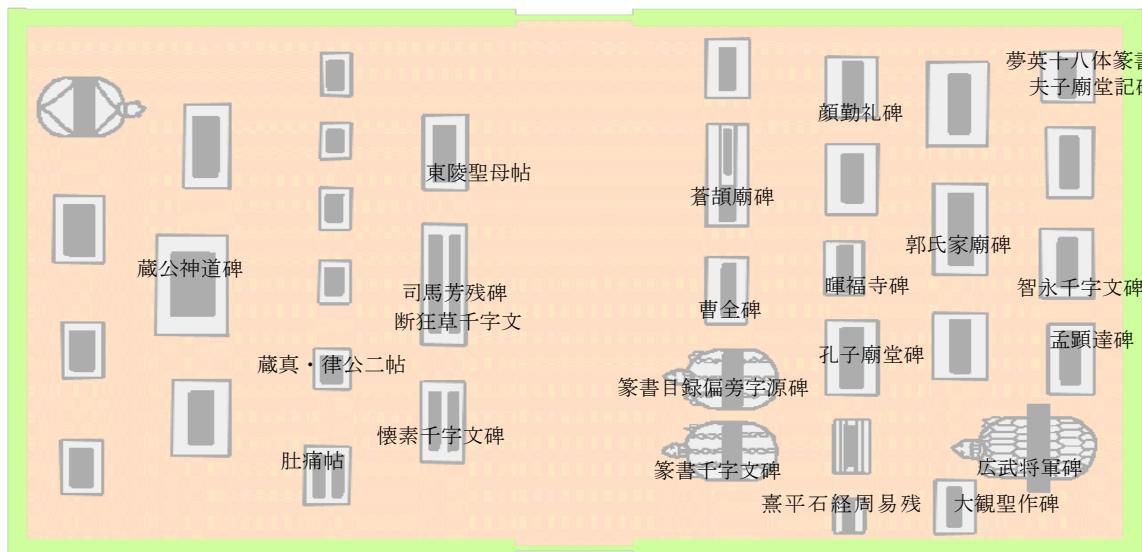
「馮宿碑」(唐・柳公權)

三墳記碑 部分



三墳記碑（碑陽）

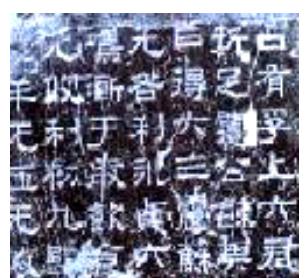
西安碑林 第3室（漢代から明代までの碑）



「熹平石經周易残石」(後漢・183年) 蔡邕書 隸書 両面に『周易』を刻している。

正面、27行238字、背面、21行177字 「石經」とは石に刻した経典のこと。それには、儒家・仏家・道家の三種があるが、これは、儒家の経典で、最古のものである。

熹平4年（175）皇帝が、儒家に命じて、経書の誤りを正し、標準のテキストを作らせ、石に刻して、洛陽の大学門外に立てさせたものの残石。八分隸で書かれている。



「篆書目錄偏旁字源碑」(宋・999年) 夢英書並序



300×99 cm (字面は 170×94 cm) 本文 17 行、満行 33 字 許慎の『説文解字』の部首 540 を、篆書で書いたもの。本文の左側に、夢英の自序 (初唐風楷書で 347 字) と、郭忠恕の手紙 (347 字、楷書) が刻されている。

自序には、「昔、秦の李斯は蒼頡、史籀の文を変化させて小篆を作った。

・・・程邈は、さらに小篆を簡略化して隸書体を作った。・・・漢の中興に、また小学を置き、許慎は、籀篆古文の数家の学を集め文字を訓釈して説文三十巻を作った。その後、文字の学問も衰え、六書の法も守られなくなったが、唐に至って李陽冰が篆書をよくした。陽冰の後は、篆書の法は世に絶えたが、自分と汾陽の郭忠恕は、ともに陽冰の篆書の美を、夏の日も冬の夜も習わなかつた日のないほどに、これを学んだ。」と記されている。

篆書目録偏旁字源碑 部分

「篆書千字文碑」(宋・965 年) 夢英書並題額

篆書千字文序碑の碑陰にある。327×103 cm 25 行、満行 40 字。

梁の周興嗣の千字文を書いたもの。

初めから碑に刻することを目的に、書かれた、珍しい千字文である。

各篆書の下の、小さな楷書の釈文は、袁正己の書。



「曹全碑」(後漢・185 年) 典型的な八分隸

正式には「郃陽令曹全碑」と呼ぶ。

272×95 cm 碑陽は 20 行、満行 45 字 全文 830 字
碑陰は、57 人の官職、人名、拠出金額が刻されている。
内容は、敦煌の漢人豪族で、郃陽令であった、曹全の功績を讃えたもの (頌徳碑)。

明末 (1,600 年頃) に郃陽県で、出土した。

「礼器碑」と並ぶ、漢隸の典型である。

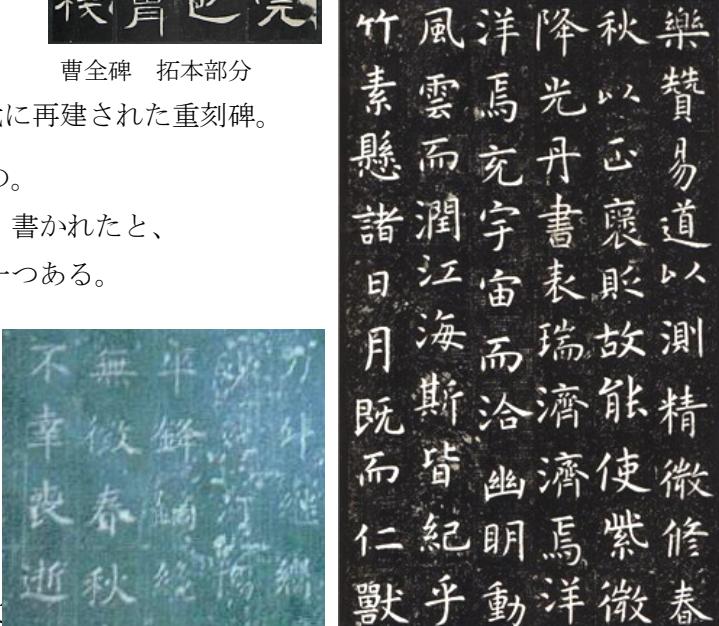


篆書千字文碑 部分

「孔子廟堂碑」(唐・628 年頃) 虞世南撰文並書。宋代に再建された重刻碑。

280×110 cm 35 行、満行 64 字 内容は孔子を讃えたもの。

唐の太宗の命令で、628 年～630 年頃 (虞世南 71～73 歳) 書かれたと、推定されている。山東省に、元代に出土した碑が、もう一つある。



「孟頫達碑」(隋・600 年) 隋を代表する楷書の碑。

207×97 cm 26 行、満行 49 字

北魏に仕えた孟頫達の頌徳碑。長男により建てられた。
南北の書法を調和させた楷書碑である。



「智永千字文碑」(宋、1109 年刻) 智永書、真草千字文

286×97 cm 閔中本を重刻したもの。両面に刻されている。

孟頫達碑 部分

孔子廟堂碑 拓本部分

智永禪師は王羲之7世の孫といわれ、陳から隋に、

100歳近くまで生きたらしい。

真蹟本は日本に1本あるだけだが、

刻本が、いくつもある。

かくし かびょうひ

「郭氏家廟碑」(唐・764年) 頭真卿56歳の撰文並書

題額は代宗皇帝。371×126cm 30行、満行58字

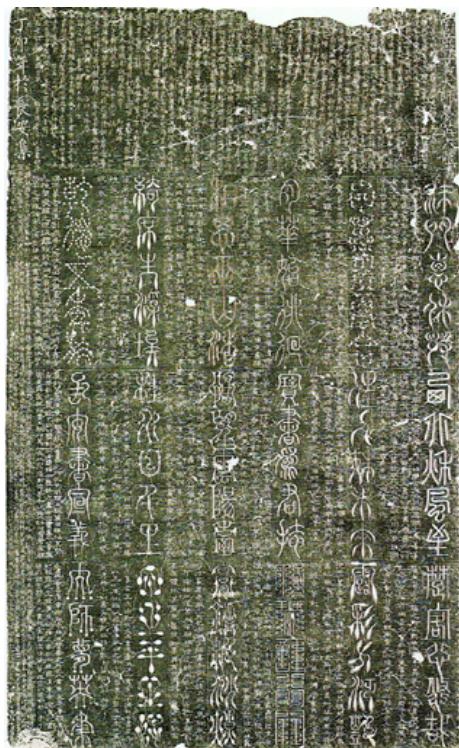
安史の乱平定の、功績第一の、郭子儀が、父のために、
建てた碑である。すでに、「顔法」が完成している。



郭氏家廟碑 部



智永千字文碑 拓本部分



夢英十八体篆書碑 拓本



顏勤礼碑 拓本部分



司馬芳殘碑 部分



98×97cm (上半分だけ) 1952年、西安で、

下水工事の時、発見された。北魏風の楷書だが、南朝人の作らしい。

だんきょうそうせんじもん

「断狂草千字文」唐・伝張旭書 草書 6個の石。

「東陵聖母帖」かいそ 懷素書 (宋・1088年) 70×139cm

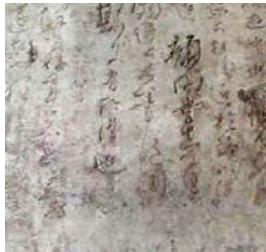
女仙人を祀る廟を改修したときの記録を書いたもの。

宋代に、長安で刻されたもの。

「懷素千字文碑」(唐・懷素書)

明代・1470年頃摸刻

草書 71×153cm



断狂草千字文 部分



懷素千字文碑 部分

東陵聖母帖 部分

「藏真・律公二帖」(唐・懷素書) 草書

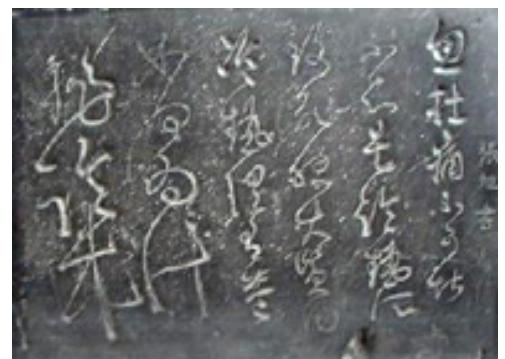
宋・1093年の模刻。140×49cm 藏真是懷素の字。

藏真・律公二帖

「肚痛帖」とつうじょう 張旭書 (宋・1058年模刻)

124×56cm 29字 「彦修草書帖」碑陰の最下部。内容は手紙。

「肚」とは、腹のこと。



肚痛帖

「藏公神道碑 (藏懷恪碑)」(唐・763年) 颜真卿撰文並書、摸刻

467×124cm 24行、満行 64字

唐の將軍・藏懷恪の記念碑。「顔体」の初期のものか?

「夫子廟堂記碑」ふうしうじょうひょう (宋・982年) 夢英書並序 唐程浩撰文

202×80cm 楷書碑 「夫子」とは、孔子のこと。

「大觀聖作碑」(宋・1108年) 徽宗書 (瘦金体) 蔡京題額 (2行6字)

417×124cm 28行、満行 69字。摸刻。

「大觀」とは、徽宗の時代の年号(1107~1110年)

「聖作」とは、皇帝の御製のこと。内容は、王安石の政策を書いたもの。

「蒼頡廟碑」そうけつびょうひ (後漢・162年) 147×79cm 24行 隸書

これは、蒼頡の記念碑。蒼頡は、漢字を創った人と言われている。

許慎の『説文解字』序によれば、蒼頡は伏羲の八卦を一步進め、

鳥獸の足跡の形をもとにして、符号(文字)を作ったとされる。

碑陽・碑陰・両側に刻されている。はっきり見える文字は数少ない。

文字の横幅はほぼ同じ、縦は自由な幅に書かれている。字間はほぼ同じ。



蒼頡廟碑 部分

「廣武將軍碑」こうぶしょうぐんひ (前秦・368年) 八分と楷書の混合書体 4面刻字 174×73cm

楷書成立の過程を知るための重要な資料。この時期、漢隸が解体し、南方では、二王たちによって、行草書が完成した。楷書に近い隸書である。

「暉福寺碑」(北魏・488年) 楷書

294×90cm 24行、満行 44字 龍門石窟の北魏の楷書とは、また違った趣である。

[西安碑林 第4室](#) (北宋の蘇軾の書。元代や明代の祝允明の書、王維の図碑など)



廣武將軍碑 部分

趙子昂八札

東坡帰去來辭詩刻石

米芾書四幅屏

趙子昂行書帖

黃庭堅詩

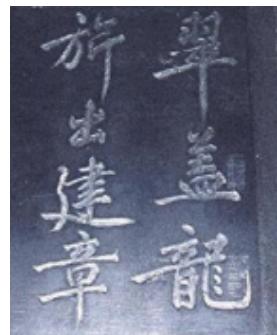
祝允明草書樂志論

「黃庭堅詩」(宋・1853年重刻) 黃庭堅書 行書

285×102 cm (字面 170×94 cm) 32 行

黃庭堅 (1045~1105年) 北宋後期の文人。

江西詩派の開祖。



黃庭堅詩 部分

「米芾書四幅屏」(宋・清代摸刻) 米芾書 行書

米芾 (1051~1107年) 北宋後期の書画家。



米芾書四幅屏 部分

「東坡帰去來辭詩刻石」(宋・1081年) 蘇軾書 行草書 265×102 cm

蘇東坡 (1036~1101年) 北宋後期の文人。

これは、顏真卿や五代の揚凝式を学んだ時期の作品。自由で力強い書。

(書論) 書は人なり、とし、その重要な要素とし、

「神・氣・骨・肉・血の5要素が備わらなければ書にならない」と述べ、

「はじめから上手に書こうと思わないのが良い」と述べ、

自然な人間性が表面にあらわれるのを重んじた。

「自分はそれほど上手ではないが、創意を出して古人の真似をしない。

これが自分でも痛快に思っているところだ」と語っている。



東坡帰去來辭詩刻石 部分

「趙子昂八札」元・趙子昂書 行書 摸刻 32×63 cm

趙孟頫 (1254~1322年) 元代前期の文人。字は子昂。

「趙子昂行書帖」(元・1313年) 趙子昂書 両面刻。

蘇軾の詩を行書でかいたもの。



趙子昂八札 部分



祝允明草書樂志論

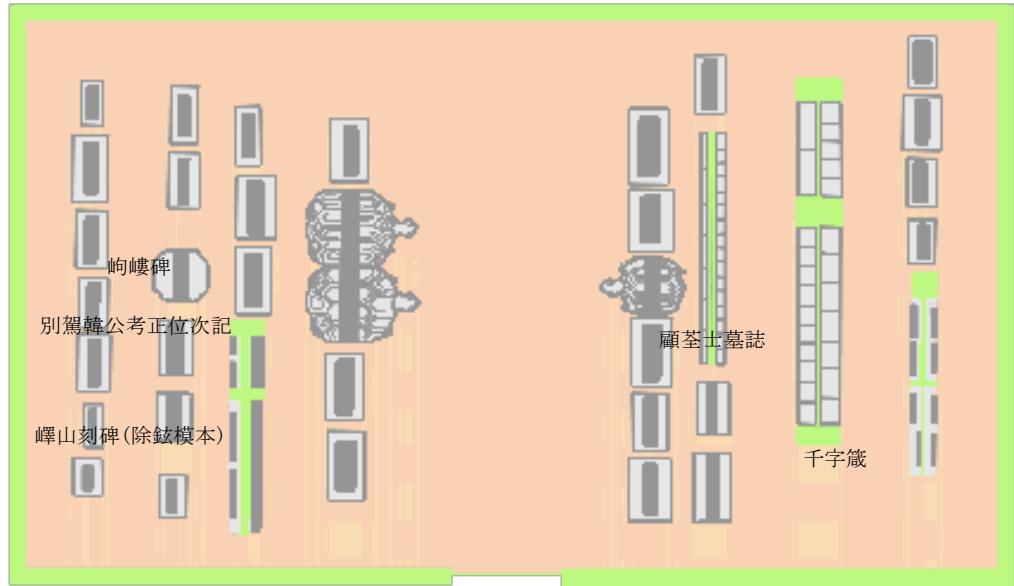
「祝允明草書樂志論」明・祝允明書 草書 281×104 cm

祝允明 (1460~1526年) 明中頃の書家。蘇州を代表する書家。

西安碑林

※部屋の反対側には、王維などの、絵画の碑がある。

第5室 (宋元明清代の碑石)



「**嶧山刻碑(除鉉模本)**」(秦・李斯書) 宋・993年に重刻 小篆 187×84 cm

秦の始皇帝は紀元前219年、巡行の途中、各地に、秦と自分の徳を讃える、7基の刻石を残した。これは、その一つ。

「**峻嶺碑**」清・康熙年間(1662~1722年)

219×85 cm 「禹碑」とも呼ぶ。再模刻碑か?
夏の禹王(前2205~2198年頃在位)が、衡山に巡行したとき、峻嶺峰の石に、大洪水を治めた功績を記した文を刻したもの、これを「峻嶺碑」と呼んでいる。

字体は、篆書でも、金文のようである。
揚州八怪の一人の、鄭燮が、臨書している。

「**別駕韓公考正位次記**」(清・1684年) 集歐陽詢書。

「**顧荃土墓誌**」(清・1851~1861) 何紹基書 楷書

張祥河撰文 31×95 cm 3石
何紹基(1799~1873年)清代の書家、学者

「**千字箴**」(清・1658年) 王鐸撰並書 行書

171×45 cmと方形の2石。
王鐸(1592~1652年)



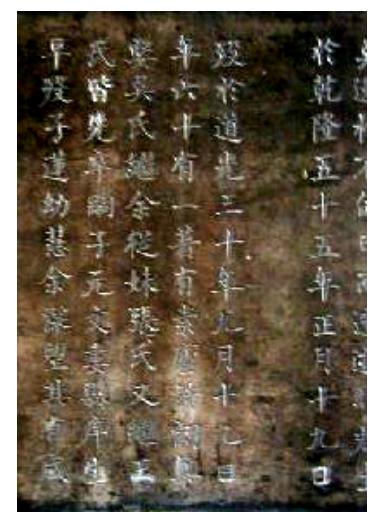
峻嶺碑 拓本部分



嶧山刻碑(除鉉模本) 部分



千字箴 部分



顧荃土墓誌 部分

西安碑林 第6室 (元明清代の文人などの書)

游華山詩

「游華山詩」(清・1842年) 林則徐書 行書 32×96 cm

林則徐は、清末の政治家。彼は特命により、臨時の大臣に任命され、1839年初、広州に着任し、アヘン2万箱分を没収して焼却し、外国アヘン商人たちを、国外に、追放した。これに、反発したイギリスが、艦隊を派遣して、1840年(道光20)、アヘン戦争が始まった。林則徐は、徹底的に抗戦したが、イギリス軍におびえた朝廷によって、免職され、1841年には、開戦の責任をとり、イリに追放されたが、1845年に赦免された。

「游天冠山詩」(清・1682年刻) 趙子昂書

文徵明の楷書の跋がある。表は「五岳真形図」 159×69 cm
天冠山は江西省渓県の南にある三峯山のこと。
マス目の中に、五言絶句を24詩、行草書で刻している。
第7段目の右に、趙子昂の自書と、1553年の秋に書かれた、文徵明の楷書の跋が刻されている。

「嚴公神道碑」 近代、康有為書 221×86 cm

嚴裕漠の経歴と家譜を、張森楷が撰文し、康有為が書いたもの。
康有為(1858~1927)清末民初の政治・思想・書論家である。
32歳のとき『広芸舟双輯』を著した。この書籍は、
阮元・包世臣の碑学尊重の流れにそって、六朝碑版を重視することを、
説いたものであり、六朝書道の啓蒙にはたした功績は大きい。

「秣陵旅舍送会稽章生詩帖」(清・1701年刻) 董其昌書 331×86 cm

董書に康熙帝が心酔したこと、明末清初から、董風が流行した。

西安碑林 第7室 (淳化閣帖) 「西安本淳化閣
(陝西本) 12列ある。

嚴公神道碑

游天冠山詩

秣陵旅舍送会稽章生詩帖



游華山詩 部分



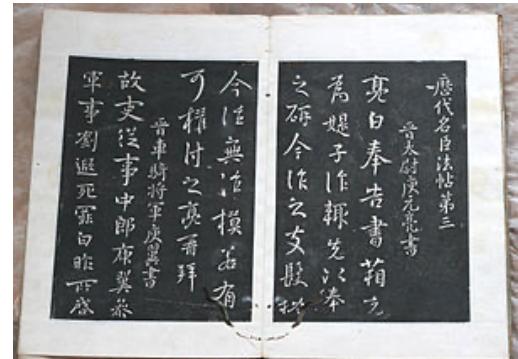
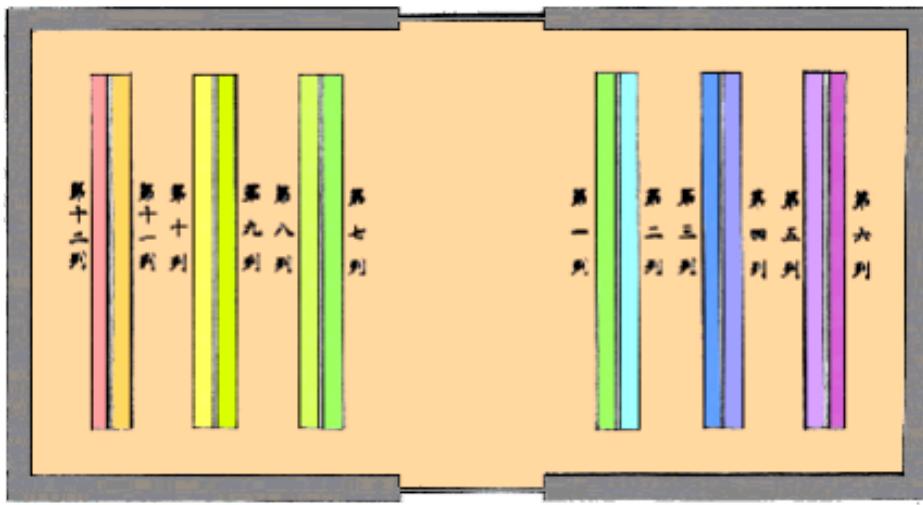
游天冠山詩 部分



嚴公神道碑 部分

秣陵旅舍送会稽章生詩帖 部分





じゅんかかくじょう

淳化閣帖 (『閣帖』ともいう)

宋の太宗の勅命により、淳化3年(992)に完成した集帖。

内府に収蔵されている歴代の名蹟を集め、王著に命じて編次摸勒させたもの。

全10巻よりなる。10巻のうち、半数が二王の書であるが、漢・魏・六朝・唐までの作品を収めている。原版は、刻されてすぐに、火災に遭い、無くなってしまった。

太宗が作らせた法帖は大臣だけに下賜されたもので、わずかしか作られなかった。その少ない原本をもとに、多くの翻刻本が作られた。さらに、つぎつぎと、それをもとに重刻されていったようである。

翻刻本には、明代の顧氏本、潘氏本、肅府本、清代の陝西本、乾隆帝による欽定重刻淳化閣帖などがある。明代の『肅府本淳化閣帖』(蘭州本・遵訓閣本)をもとに刻されたものが、第7室の淳化閣帖である。

第1巻は歴代帝王の書(21人)、第2巻は歴代名臣の書(19人)、第3巻は歴代名臣の書(31人)、第4巻は歴代名臣の書(17人)、第5巻は諸家の書(17家)、第6巻~8巻は王羲之の書、第9巻~10巻は王献之の書。

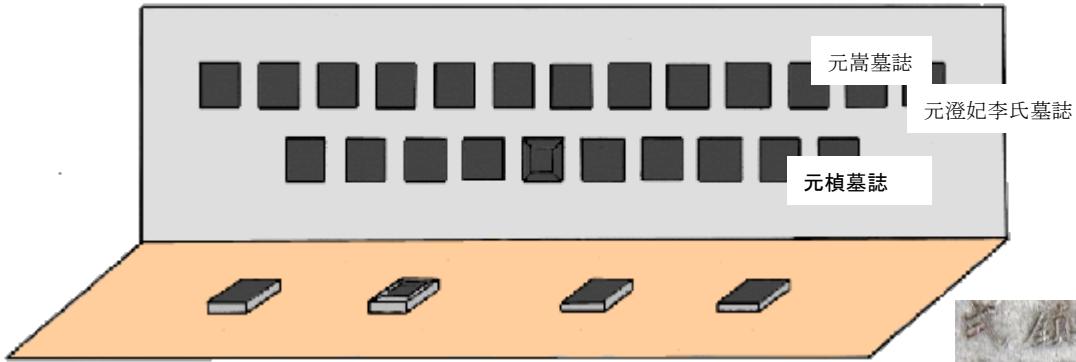
第1列右側	歴代帝王と名臣
第2列右側	歴代帝王と名臣と王羲之
第3列右側	歴代名臣
第4列右側	歴代名臣と王羲之
第5列右側	歴代名臣と諸家
第6列右側	歴代名臣と諸家と王羲之
第7列右側	王羲之
第8列右側	王羲之
第9列右側	王羲之と王献之
第10列右側	王羲之と王献之
第11列右側	王献之と跋
第12列右側	王献之と跋

第1列左側	歴代帝王と名臣
第2列左側	歴代帝王と名臣と王献之
第3列左側	歴代名臣
第4列左側	歴代名臣
第5列左側	歴代名臣と諸家と王羲之
第6列左側	歴代名臣と諸家と王羲之
第7列左側	王羲之
第8列左側	王羲之
第9列左側	王羲之と王献之
第10列左側	王羲之と王献之
第11列左側	王献之と跋
第12列左側	王献之と跋

以下の渡り廊下にあるものは、于右任(1879~1964)のコレクションの一部である。

これらのほとんどが、洛陽近郊から出土した北朝の墓誌銘である。

西安碑林 第1墓誌廊（北魏王朝の王族の墓誌が壁面にはめこまれている）



右側から、

「元澄妃李氏墓誌」（北魏・501年） $51.3 \times 51.3\text{cm}$ 13行、満行14字。

「元嵩墓誌」（北魏・507年） $57.5 \times 52.5\text{cm}$ 17行、満行17字。

「元楨墓誌」（北魏・496年） $71 \times 71\text{cm}$ 17行、満行18字

洛陽遷都から2年後の書で、まだ漢人の影響を受けていない頃の書。

隸書から楷書への過渡期の代表的書体と思われる。

これは、北魏中期の代表的楷書である。一級品の墓誌である。



元楨墓誌 部分

その他、「楊乾墓誌」（北魏・526年） $59 \times 60\text{cm}$ 23行、満行23字。

など。

西安碑林 第2墓誌廊

右側から、「元引墓誌」（北魏・523年）「宣武帝嬪李氏墓誌」（北魏・526年）「元簡墓誌」（北魏・499年）

「元譚妻司馬氏墓誌」（北魏・523年）など。

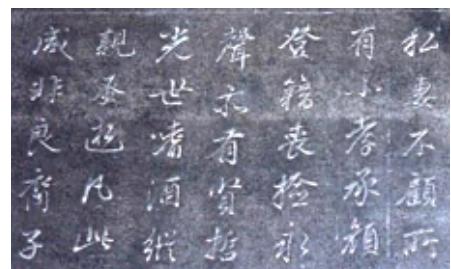
西安碑林 第3墓誌廊（北周・北斉・隋の墓誌）

右側から、「步六孤氏陸須密多墓誌・蓋」（北周・572年）

「李夫人崔宣華墓誌」（北斉・562年）「段威墓誌・蓋」（隋・595年 楷書）など。

西安碑林 第4墓誌廊（隋・唐の宮人の墓誌などがある）

「宮人典綵朱氏墓誌」（隋・610年）



徐翼所公家訓 部分

西安碑林 第5墓誌廊（唐の墓誌）

「張士則墓誌・蓋」（唐・747年）など。

西安碑林 第6墓誌廊（清・明・元・宋・梁の墓誌）

「徐翼所公家訓」（明・1617年、董其昌） $241 \times 88\text{cm}$ （字面は $165 \times 85\text{cm}$ ）

西安碑林 第2室外壁「蟻光炎先生墓表」（近代・于右任）

于右任は中華民国の官僚で

西安碑林 第3室外碑牆（明・清代の碑）

書家。太平老人と号し、

西安碑林 第4室外碑牆（明・清・現代の碑）

草聖と称えられた。

西安碑林 第5室外碑牆（唐・明・清代の碑）



蟻光炎先生墓表

西安碑林 第6室外碑牆（唐・元・明・清代の碑）

せんせいれきしづくぶつかん
陝西歴史博物館

1991年6月に開館した。

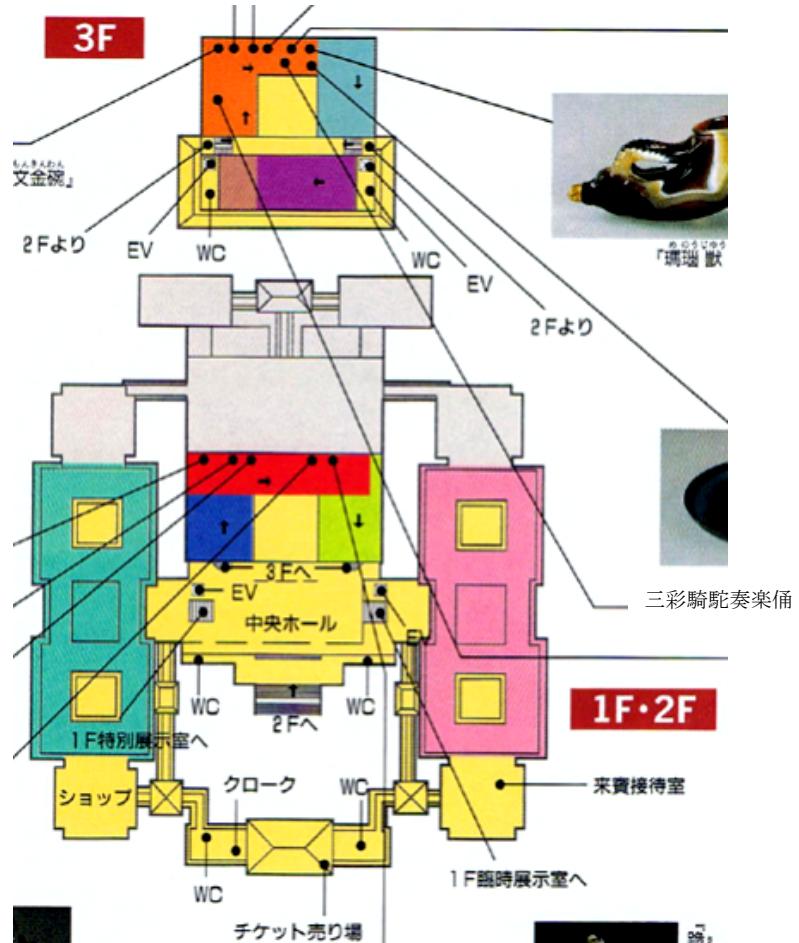
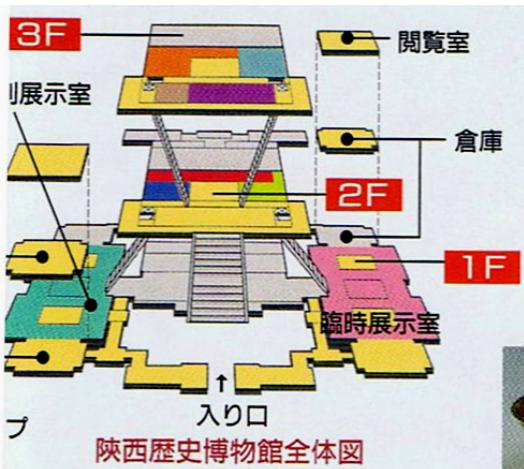
博物館は、唐風建築群で成っている。

先史時代から清代までの、陝西省の出土品が、

青銅器や工芸品を中心に、収蔵、展示されている。コレクションは37万点余。3階建て。

2階は、先史時代から紀元前3世紀の秦代まで・・・殷・西周代の青銅器や始皇帝関係の文物など。

3階は、漢代から清代まで・・・など唐三彩の傑作や、「宮女図」や「礼賓図」など唐代壁画など。



「三彩騎駝奏樂俑」(唐・8世紀) 唐三彩の傑作。

異国情緒たっぷりに、音楽に興じる人びとの像。彫塑と陶芸の技術を融合した名品。

唐三彩は、盛唐時代(8世紀)を中心に、約80年間作られ、

その後、姿を消した“幻の陶器”といわれる。

これは、盛唐美術を代表する逸品である。

8人の楽隊は、別に作られて、乗せられたもの。

中央の女性は、歌手か舞妓と想われる。

楽隊は、琵琶や笙や笛、竪琴などを奏しているが、その頭部や、

楽器、両手以外は、同じ型から成形されたものと推定される。

高さ 57.4 cm 奥行き 40.8 cm

※唐三彩とは、緑、褐色、藍、白、黄などの釉薬を配色した、唐代に作られた陶器。





「三彩立女俑」(唐・8世紀) 高さ 44.6 cm

盛唐の美人は豊満な女性であった。

唐美人である。

侍女の像と想われる。



唐代の絵画の多くは失われたが、近年になって、陵墓壁画が発見された。これらの壁画は唐代絵画の頂点とされている。

則天武后は、権力争いの末、我が子と孫に死を賜った。武後の死後、中宗は、我が子と兄のために、墓を造り、手厚く葬った。

これらは、そこに描かれた壁画である。

「礼賓図」(唐・706年) 184×243 cm
則天武后的次男の章懷太子は、母親の武后に疎まれ、684年に、31歳で不遇の生涯を閉じた。これは、その陵墓壁画である。

この図は、3人の異民族の使節が、唐王朝に拝謁する場面が描かれている。



大雁塔

大雁塔の南門にある、褚遂良の[雁塔聖教序と序記]を観る。



大雁塔

龍門石窟



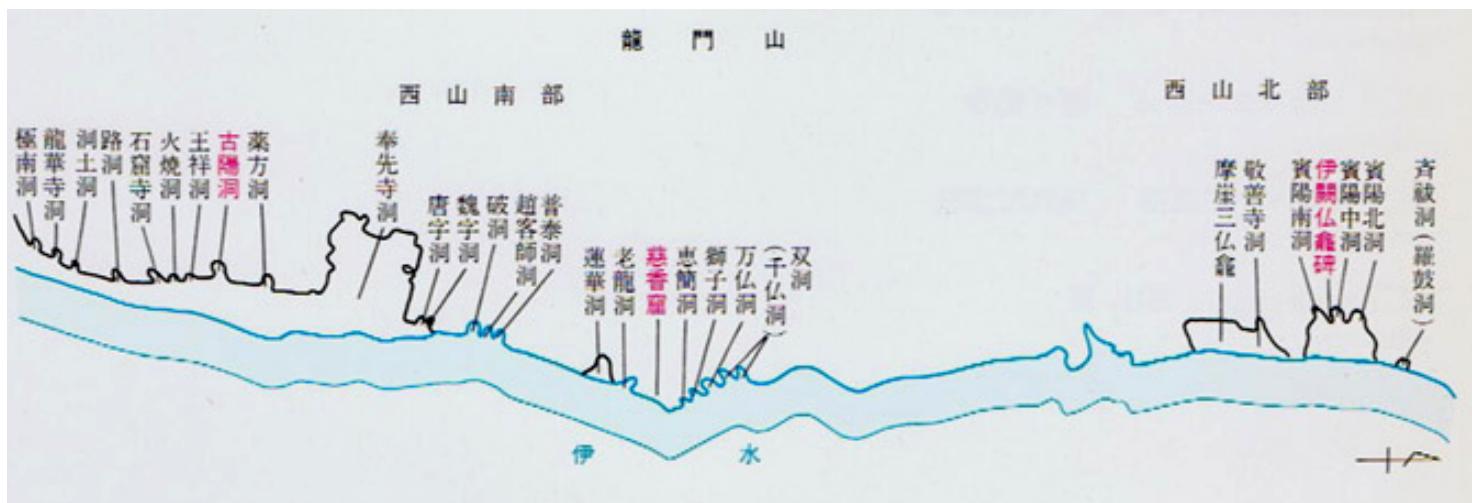
西山

中国の洛陽市の南、約 13 キロの伊河の両岸にある石窟寺院。

北魏の孝文帝が、大同から洛陽に遷都した年（494 年）、から造られ始めた。

岩は、彫刻にむいている玄武岩であるらしい。

石窟や石龕は 2100 以上あり、約 10 万体の仏像、3600 以上の碑刻題記がある。碑刻題記のうち、約 3 割が北魏、約 7 割が唐代に造営されたものである。



最も古い洞は、「古陽洞」窟内の私的な仏龕の造営である。

「賓陽洞」3 窟は、賓陽中洞のみが北魏時代に完成し、

南洞と北洞は初唐に完成した。「蓮華洞」も北魏時代に造られた。

また、「藥方洞」は北齊から隋代に造られた。

唐の 641 年（貞觀 15 年）賓陽洞に褚遂良の「伊闕佛龕碑」^{いけつぶつがんひ}が建碑された。

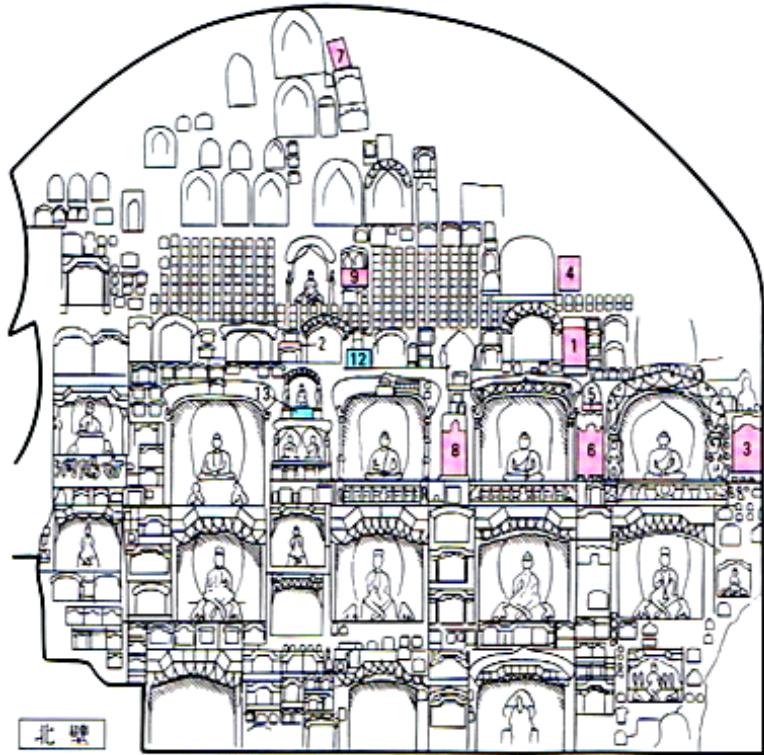
初唐から中唐にかけ「敬善寺洞」、「惠簡洞」、「万仏洞」が完成し、唐の高宗時代に、龍門石窟は最盛期を迎えた。絶頂期の石窟が、

高宗が造らせた、龍門石窟で最大の「奉先寺洞」である（675 年に完成）。

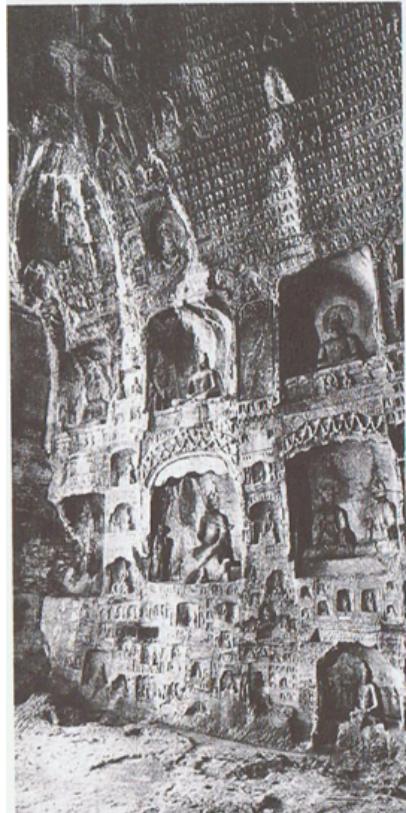


奉先寺の盧遮那仏

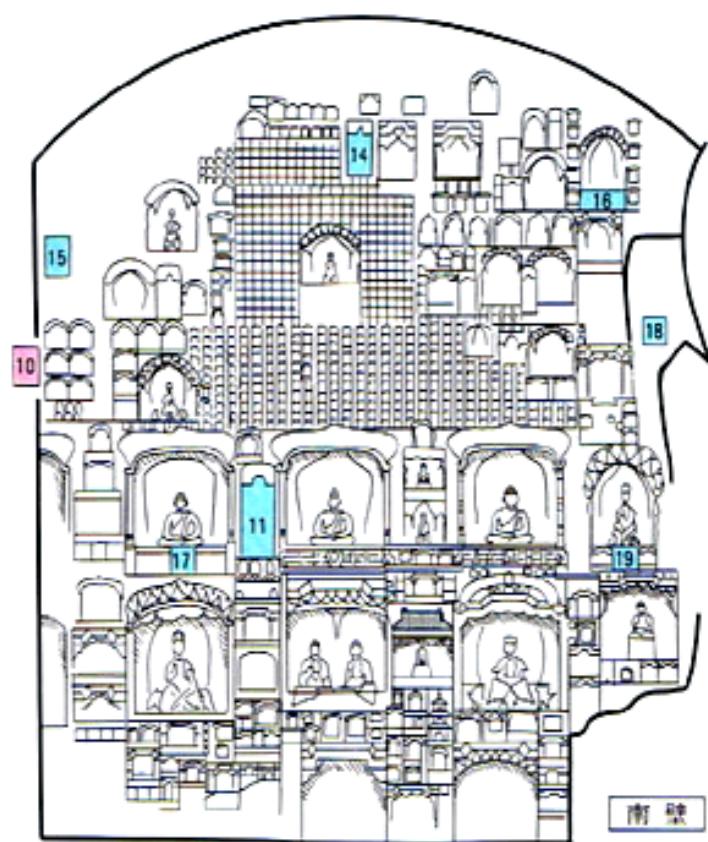
古陽洞に、「龍門二十品」^{りゅうもんじゅっぽん}がある。これは、龍門石窟の造像記のうち、特に優れた 20 点を集めたものである。北魏時代の 495 年から 520 年にかけて彫られたもので、間違って六朝体などと呼ばれているが、北魏の楷書を代表する作品群である。



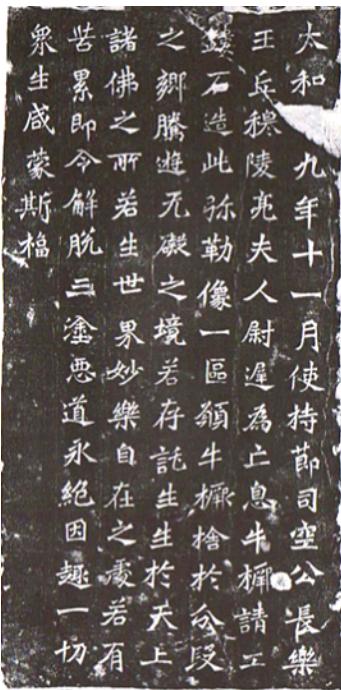
- 1、牛懶造像記 2、一弗造像記 3、始平公造像記 4、元詳造像記
 5、解伯達造像記 6、魏靈藏造像記 7、太妃高造像記 8、楊大眼造像記
 9、道匠造像記 12、解佰都造像記 13、惠感造像記



古陽洞 南壁東部 部分



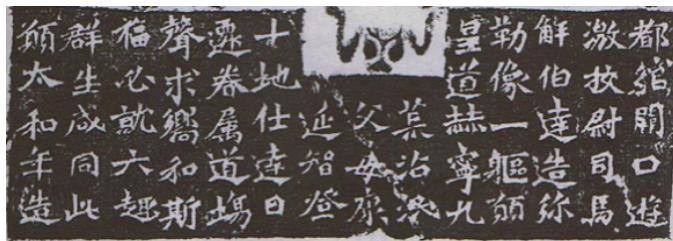
- 10、鄭長猷造像記
 11、孫秋生造像記
 14、賀蘭汗造像記
 15、馬振揮造像記
 16、太妃侯造像記
 17、法生造像記
 18、元燮造像記
 19、元祐造像記
 20、慈香慧政造像記(これは、「慈香洞」にある)



1、牛橛造像記(495年)
66×34 cm 7行、満行66字。
亡き息子の供養のため。



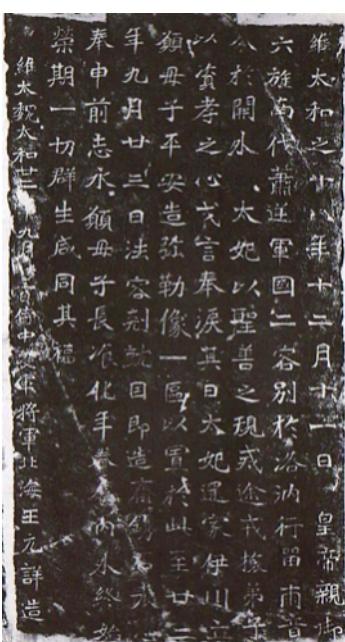
2、一弗造像記 496年 13×34 cm 10行、各行3字。
亡き夫が、仏の国に行けるように祈願。



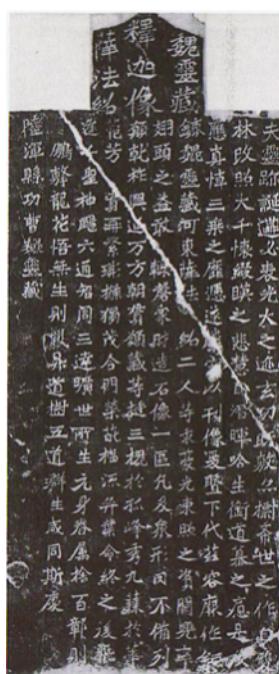
3、解伯達造像記(495~499年頃) 13×37 cm
14行、各行5字。一切衆生の幸福を祈願。



3、始平公造像記 (498)



4、元詳造像記 (498年)
78×42 cm 9行、満行18字
一族の繁栄や長寿などを祈願。



5、魏靈藏造像記 (?年)
91×38 cm 10行、満行23字
一族の繁栄などを祈願。



6、魏靈藏造像記 (?年)
91×38 cm 10行、満行23字
一族の繁栄などを祈願。



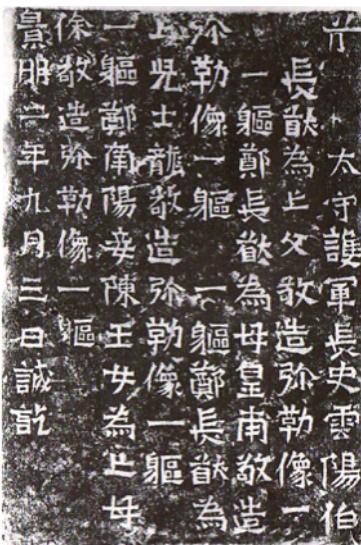
7、太妃高造像記 (?年)
40×24 cm、5行、満行10字
早逝した孫の供養のため。



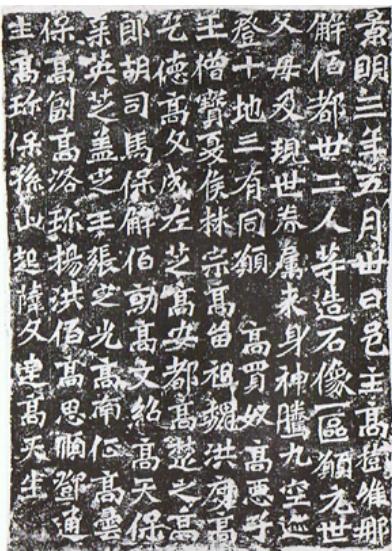
8、楊大眼造像記 (?年)
95×41 cm 11行、満行23字。
亡き孝文帝の供養のため。

9、道匠造像記 (?年)

24×47 cm 13行、満行7字。
父母の成仏などの祈願のため。



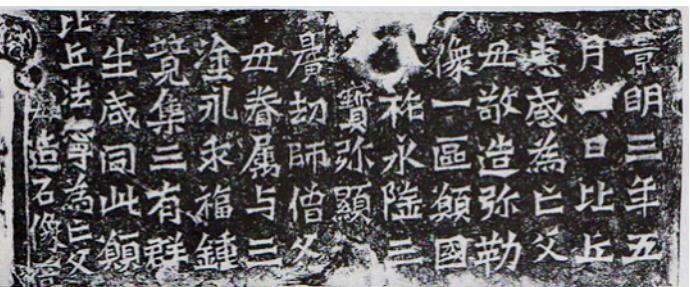
ていちょうゆうぞうぞうき
10、鄭長猷造像記(501年)
50×35 cm 8行、満行12字
亡き父母、子の供養のため。



かいはくとぞうぞうき
12、解佰都造像記(502年)
42×28 cm 10行、満行14字
祖先の供養、一族の成仏祈願。



げんじょうぞうぞうき
18、元變造像記(507年) 27×49 cm 13行、満行9字。
亡き祖父母と父母を供養し、一族の成仏を祈願したもの。



えかんぞうぞうき
13、惠感造像記(502年) 19×45 cm 14行、満行5字
祖先や父母の幸福を祈願したもの。



そんしゅうせいぞうぞうき
11、孫秋生造像記(502年)
130×49 cm 13行、満行39字。
父母も供養と、自分の幸福を祈願のため。



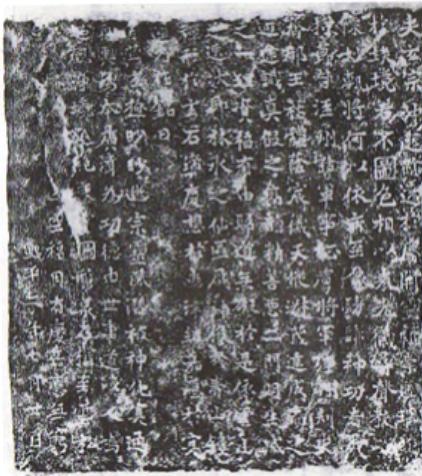
がらんかんぞうぞうき
14、賀蘭汗造像記(502年)
50×35 cm、5行、満行10字
亡き夫の供養のため。



たいひこうぞうぞうき
16、太妃侯造像記(503年) 25×79 cm 22行、満行6字
幼い孫の広川王・靈遵の隆盛と、仏法の流布のため。



ほうじょうぞうぞうき
17、法生造像記(503年) 35×38 cm、
11行、満行13字
北魏6代皇帝・孝文帝、北海王元詳と母の
高氏を讃え、供養したもの。



19、元祐造像記 (517年)
40×37 cm 16行、満行 16字
自分のために。

これだけ、慈香洞にある。



20、慈香慧政造像記 (520年)
39×38 cm 10行、満行 11字
仏教の繁栄や民衆の幸福を祈願したもの。

いけつぶつがん ひ 伊闕仏龕碑 唐・貞觀 15 年(641) 褚遂良書、撰文岑文本

5.0×1.9m (字面は 288×190 cm) 32～33 行、満行 51 字。

ひんようさんどう
賓陽三洞の中洞と南洞の間にある磨崖碑。

魏王・李泰の命で書かれた。

内容は、魏王（太宗の第4子）が、母の文徳皇后・長孫氏の供養のために、賓陽三洞を、造営したことを記している。

「三龕記」とも呼ばれる、褚遂良の碑の中では最大のもの。
「伊闕」とは龍門のこと。



伊闕仏龕碑 拓本 部分



龍門石窟の伊闕仏龕碑

書以外の見どころ。

「蓮花洞」主尊は、釈迦牟尼立像。高さは、5.1 メートル。



「慈香洞」

「万仏洞」唐の7世紀後半に造営されたこの石窟には、15,000 の仏像が刻されていると言われている。



奉先寺

付録

西安碑林博物館・石刻藝術陳列館資料追加



りじゅぼもん
李壽墓門 (唐・630)

204×180 cm

りえん
李壽は、唐の高祖李淵の父方の従弟。最上部には、牙をむく獸のレリーフがある。扉には、上に鳳凰、下に孔雀が刻され、門枠には、蔓草文が線刻されている。



しょうりょうろくしゅん
昭陵六駿 特勒驃

(唐・636) 高さ 171 cm
たいそうりせいみんしようりょう
唐の太宗李世民の昭陵にあつた、石のレリーフの1つ。
太宗は、ともに戦った6頭の駿馬の浮き彫りを造らせた。
内、2点は、アメリカの博物館が所蔵している。



ぼさつりゆうぞう
菩薩立像

(唐・8世紀) 高さ 110 cm
白大理石の像。
盛唐期の、高度な、彫刻の技術を示している。
「東洋のヴィーナス」とも呼ばれる。



りせいくんせつかん
李靜訓石棺 (隋・608)

高さ 122 cm、幅 89 cm、長さ 192 cm
李靜訓は隋の皇帝の親戚で、9歳で亡くなった。
よせむねづくり
寄棟造の家屋を模している。
ひらくものはすなわちしづ
棟の中央正面に、「開者即死」と刻まれている。盜掘防止のためらしい。



によらいこうきやくぞう
如來交脚像 (北魏・471)

高さ 86 cm、幅 55 cm

けさ
袈裟を両肩にまとい、手を合わせ、両足を交差させた弥勒仏。
こうはい
光背には、中央に蓮華、周囲に小坐仏や火焰文がめぐつてゐる。背面には弥勒下生説話図が描かれている。



ぼさつとうぞう
菩薩頭像

(隋末~唐初・7世紀)

高さ 12 cm
宝冠に化仏があるので、觀音菩薩と考えられている。



石台孝經碑 部分



せいあんひりんひてい
西安碑林 碑亭

せきだいこうきょうひ
「石台孝經碑」が中央に見える。



碑林 第1室



明代城壁



明代城壁の上



大雁塔



西門（安定門）



清真大寺



南門（永寧門）



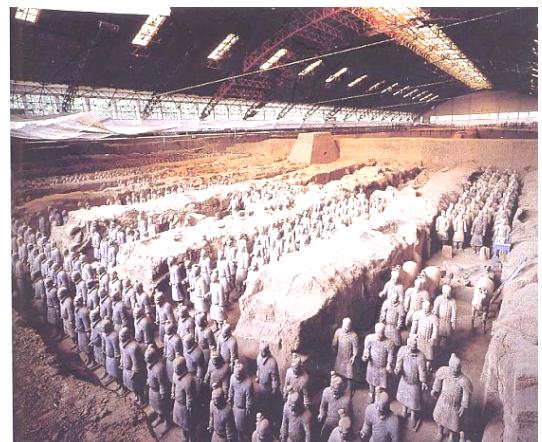
小雁塔



鼓樓



青龍寺



兵馬俑坑



鐘樓



華清池